

## 第9回超領域社会工学研究会報告

日時： 10月27日（土）13：30から17：50まで

場所： 長井壽満邸（目黒区）参加者9名

恒例の部会長の挨拶の後、研究会員相互の意識向上を目指す目的で制作された研究会歌（塩味は永遠に！）を男性ピアニスト伴奏のもと全員で斉唱しました。会員のN氏の古希をお祝いし、発表会へと進みました。参加9名のすべての方が発表されました。研究発表内容は次の通りです。

長井壽満 「ストリップ考 - 万博とメディア」

女性の裸体に深く関心をよせている発表者の「裸体そのものが商品となったのは何時なのか？」という問題意識からの発表でした。

万博のプロモーションの道具としてストリップの有効性がビジネスとして認知されることになり、エンターテインメント性を帯びるようになりました。現代の性風俗はメディアによって創られたものであり、商業主義と密接に結びついたものであるとの考察がなされました。

安田裕子 「障害者ケアのパラダイムシフトー筑紫舞の中にみるスピリチュアルケアー」

筑紫舞とは傀儡子（くぐつ）と呼ばれる芸能集団の人々によって古来伝承されてきたとされる、伝統芸能。跳躍や回転を取り入れた、独特の足づかいを大きな特徴とした舞です。

障害者ケアの新しい視点として「自分の代わりに種々の困難を背負ってくれている」という逆転の発想で新たな障害者ケアの道筋が見えてくることが示唆されました。

加藤香須美 「リラックスする涅槃仏ー泰國と日本國の比較からー」

涅槃とは、仏教において煩悩を滅尽して悟りの智慧（菩提）を完成した境地のことです。タイの涅槃像の特徴は足先がきちんとスクエア状に揃えられているが日本の涅槃像は足が揃っておらず、タイの涅槃像から見るとただ寝ている（寝像）に過ぎないのではないかとの説を発表されました。このような観点から見ると日本の涅槃像はリラックスしており、それが他の宗教にも寛容な我が国の宗教観にも現れているのではないのでしょうか。

小澤健司 「園芸が我々の生活にもたらす効用について」

殺風景な食卓に一輪の花が飾られるだけで気分が和みます。花を見たときの感情の変化に関するデータから植物の有用性についての考察がなされました。緑の効用は科学的に証明されてはいませんが、心理的な効果は大きいと考えられます。植物と共存することで心豊かな生活を送ることができ、生活の向上に役立つことでしょう。

増子保志 「メディアが創るラーメンの味ーラーメン評論を中心としてー」

巷には食べ物に関する情報が溢れかえっています。その中でもラーメンに関する情報は特にマニアック的なものが多くみられます。数値によるラーメン店の価値づけを行い、その動向はラーメン店の評判に大きな影響力を持ちます。では店の生死を左右するようなラーメン評論の中でラーメンはどの様に表現されているのでしょうか。結論として、ラーメンの味はメディアによって創られたものであり、具体的に味を説明されたものは皆無ということが分かりました。

鈴木美喜 「比べてみよう」

「違い」という観点から色々なものを比べてみると新しい発見があります。そのような発想のもと『くらべる時代 昭和と平成』『くらべる世界』『何度でも行きたい世界のトイレ』『くらべる東西』という4冊の本を選んで比較考察を試みました。東と西、昭和と平成など改めて比べて見ると新しい発見があります。学術的な探求を行う上で「比較」は重要な概念であり、まさに“目から鱗”の発表でした。

加藤鳳 「加藤鳳の半島めぐり第一弾！ー牡鹿半島編」

半島マニアの発表者が最近訪ねた牡鹿半島を中心に食についての考察があり、東日本大震災後の復興が進んでいない状況の報告がなされました。

草野純子 「韓国の食文化ー建築物から考える薬食同源と住環境の工夫ー」

薬食同源（医食同源）とは日頃からバランスの取れた食事を採ることで病気を予防し治療しようとする考え方です。韓国料理には古来から薬食同源という思想が根付いており食べるものは全て薬になるとの事です。韓国と言えば“キムチ”です。キムチは発酵により乳酸菌が増え代謝が良くなる食品です。しかし、キムチの食べ過ぎは塩分の過剰摂取に繋がります。なんでも過ぎたるは及ばざるがごとしですね。

宮園圭太郎 「瀧廉太郎と和製ツゴイネルワイゼン」

夭折の天才“瀧廉太郎”（23歳で没す）が作曲した「荒城の月」は十数年後、

山田耕作によって編曲されました。滝廉太郎の原曲は「花のえん」の「え」の個所に#があります。即ち短音階の第4音が半音上がっていますが、これはサラサーテのツゴイネルワイゼンやジプシー音階の特徴で日本の旋律ではないものです。山田は瀧の原曲が西洋臭さがぬけてない点が際立っていた故、旋律に日本の歌としての形を整える目的で#を除いて編曲しました。

ではなぜ瀧は異質な#をいれたのでしょうか？考察の結果、瀧は土井晩翠の歌詞や荒城の風景、ツゴイネルワイゼンの心を揺さぶるメロディーラインを意識したものではないかと考えられるとの事です。余談ですが戦争中、山田は多くの軍歌を作曲した音楽家。こんなところにも軍国主義の萌芽が出ていたのかもしれない。

今回も参加者全員の研究発表ということで、多種多様な内容で非常に充実したものになりました。討議の後、懇親会は自由が丘のタイ料理店「クルア・ナムブリック」で行いました。聡明な研究部会長が珍しくお店を間違えて予約するというアクシデントに見舞われたもののタイ料理のスパイシーさに心奪われ、各会員とも充実した時間を過ごしました。

次回は2019年3月23日に朝霞市にて開催予定です。

